忙中一筆

議会基本条例がつなぐ出会いと支え

橋場利勝

栗山町は農業が基幹産業であることは言うまでもない。

私も農業を営み、畑作一八ヘクタールに種子馬鈴薯、小麦を中心に作付けしている。二〇〇〇年一〇月に議長に就任して以来、作物は種子馬鈴薯、小麦の二種類に特化せざるを得なくなり今日に至っている。議長就任以前は高収益作物を多数扱い、農業者としては収穫が楽しみな日々を家内と二人で送っていた。

今回、自治研からの依頼は「自分の仕事か、趣味について」ということであったが、農業以外特に趣味として自慢できるこれといったものもない。

やはり、議長職にあるものとしては議会のことが片時も頭から離れないものだ。

この数年、栗山町議会の改革が全国の先行モデルとして、いろいろな専門誌やマスコミに紹介され、話題となっている。

しかし、栗山町議会は栗山町民にとって開かれ、信頼されるべく改革を進めたのであって、他の自治体議会に対し、「こうすべきだ」と言っているわけではない。

現在、地方自治体は自主自律が求められ、地方分権の時代に入り、独自の生き方が求められている。そのような中、栗山町議会はこのように運営し、住民参加を求めることを宣言したのが二〇〇六年五月一八日に制定した議会基本条例である。

すでに栗山町議会基本条例については私自身、多くのところでお話をさせていただき、自治研はじめ多数の専門誌にも掲載されているので、ここではその説明は避け、この条例に深く関わっていただいた人々の紹介をしてみたい。

大きく分類し、

1　我々が組織する系統議会議長会関係者

2　制度・条例の内容について分析、解説をし、法的解釈を得た地方自治学者のみなさん

3　全国に議会改革の取り組みを発信していただいたマスコミ関係者

以上に分けてお話することにしたい。

◇　◇

条例制定一年前に議会報告会を実施することになる。

これを知ることになったのは全道町村議会議長会主催の事務局長研修で岡本光雄全国町村議会議長会議事調査部長から宮城県本吉町議会の取り組みの事例が紹介された。出席していた中尾前事務局長が帰庁し、私にこれまでの改革のまとめにこの報告会をしてはどうかと話した。私も住民との直接対話の必要性を強く感じていたので、岡本部長に連絡し、本吉町に視察に出向き、報告会を実施することになる。報告会は全道町村議長会の勢籏事務局長が昨年に引き続き本年も局員とともに視察され、また勢籏局長は栗山町の取り組みを議長会ルートで全国に発信していただいている。

この報告会を条例化しようと取り組んだ結果が基本条例につながる。その際、参考としたものは北海道自治研究第四三〇号（二〇〇四年一一月）で発表していた札幌市職員渡辺三省氏の私案だ。前中尾事務局長が同氏に直接会い、同意を得、栗山型にカスタマイズしたのが栗山町議

会基本条例となる。

条例素案ができた時点で、その後栗山町議会の論理的支柱となる神原勝・北海学園大学法学部教授と出会うことになる。神原先生と私の信頼関係は厚い。これまで幾多の重要な時点で適切なアドバイスをいただき、改革が住民に信頼される形になってきた。栗山町議会にはなくてはならない専門的知見である。神原先生の紹介で制定一周年記念講演を地方自治の権威、松下圭一先生に「自治体再構築」と題し、お話していただいた。このことが総合計画議会修正案の足がかりとなっていく。

条例に関心を持ち、何度となく来町していただいているのが　江藤俊昭・山梨学院大学法学部教授、広瀬克哉・法政大学法学部教授である。両氏は条例制定の時から地方自治体議会の新しい取り組みとして、その動きを注視していただいている。加えて、大学の授業や他の講演会等において、栗山町の事例の発表も数多くしていただいている。さらに両氏は議会報告会や一般会議（総合計画・合併問題等）、新たな展開の節目にその証人としてお呼び申し上げ、論理的裏付けをお願いしているところである。

このように、神原先生をはじめ、制度学者のみなさんの応援は何よりも心強い。正しいことを行なっていても論理的証明が必要であることは言うまでもない。

◇　◇

次に我々の取り組みを全国発信していただいた強力なルートとしてマスコミの力がある。

どんなに先進的な事例で有効性があっても、新たな取り組みには各方面からアレルギーが出ることはしかたがない。先行する者の宿命と割り切っているが、正しく伝わることが大事である。そのためマスコミのみなさんには大変なご協力をいただいている。

最初に大きく取り扱ってもらったものは月刊ガバナンスである。議会報告会、条例、総合計画と三度にわたり地方議会改革事例として掲載していただいた。千葉茂明編集長にもその都度来町していただき、ご苦労をかけているが、同誌が同一議会を三度も扱うのは栗山町議会が初めてという。

全国紙の記者を中心に自治、分権ジャーナリストの会が存在する。二〇〇六年一一月九日国会記者会館に招かれ、栗山町の取り組みを話させていただいた。

その折、幹事社として調整にあたっていただいたのが読売新聞の青山彰久編集委員だ。なぜか青山氏とは気が合う。取材以外でも幾度となく来町いただき、分権を取り巻く情勢、地方議会の動き等、最新の情報をいただいている。この国会記者会館であった研修会が全国レベルで栗山町議会が深く理解を得るようになったものと考えている。

朝日新聞の坪井ゆづる編集委員も同様に幾度となく来町され、記事として大きく取り扱っていただき、強力な理解者の一人である。昨年は全道町村議会議長会の研修講師としても来道いただいている。

地元、北海道新聞は地方自治に詳しい志子田徹記者がいる。昨年三月の議会報告会を約半面使い、詳しく記事にしていただいた。条例の根幹である報告会が誰から見ても理解できるよう表現していただいたことが何よりうれしい。

そのほかにも多くの方々の協力があり今日に至っている。条例を通じ、世界が広がり、思ってもみないようなことが起きて、多数の人にお会いできたことを心より感謝しているしだいだ。

今までの協力に恥じないよう一三人の議員が一体となり、塊となって本来求められる二元代表制を現実のものとするため、力強く邁進するつもりである。

〈はしば　としかつ・栗山町議会議長〉